

Day-to-Day Blood Pressure Variability and Risk of Dementia in a General Japanese Elderly Population: The Hisayama Study

大石, 絵美

<https://hdl.handle.net/2324/2236056>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : © 2017 The Authors. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution Non-Commercial- NoDerivs License

氏 名： 大石 絵美

論 文 名： Day-to-Day Blood Pressure Variability and Risk of Dementia
in a General Japanese Elderly Population
The Hisayama Study
(家庭血圧の日間変動と認知症発症との関連：久山町研究)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】受診間の血圧変動の増大が認知機能低下および認知症発症の危険因子であることを報告した疫学研究が散見される。しかし、家庭血圧の日間変動と認知症発症との関連を検討した研究はない。

【方法】認知症のない60歳以上の日本の地域高齢住民1,674名を5年間追跡した(2007-2012年)。家庭血圧は毎朝3回、28日間測定した。血圧の日間変動の指標として家庭収縮期血圧(SBP)および拡張期血圧(DBP)の変動係数(CoV)を算出した。それぞれのCoVレベルは4分位に分類した。全認知症、血管性認知症(VaD)およびアルツハイマー病(AD)発症のハザード比および95%信頼区間は、Cox比例ハザードモデルを用いて算出した。

【結果】追跡期間中、194例が全認知症を発症した。そのうちVaDは47例、ADは134例であった。性年齢調整後の全認知症、VaDおよびADの罹患率は、家庭SBPのCoVレベルの上昇に伴い有意に上昇した(全ての傾向性P値<0.05)。これらの関係は、潜在的な交絡因子に家庭SBPを追加した多変量調整後も変わらなかった。家庭SBPのCoVレベルが最も高い群(第4分位)における全認知症、VaDおよびAD発症のハザード比(多変量調整後)は、最も低い群(第1分位)に比べ、有意に上昇した(全認知症:ハザード比=2.27、95%信頼区間=1.45-3.55、P<0.001、VaD:ハザード比=2.79、95%信頼区間=1.04-7.51、P=0.03、AD:ハザード比=2.22、95%信頼区間=1.31-3.75、P<0.001)。家庭DBPのCoVレベルと認知症およびその病型との間においても同様の関連を認めた。一方、家庭SBP値はVaD発症と有意な正の関連を認めたが、全認知症およびAD発症との間に有意な関連を認めなかった。各認知症の病型において、家庭SBP値とそのCoVレベルとの間に明らかな交互作用は認めなかった。

【結論】日本の地域高齢住民では、血圧の日間変動の増大は、平均家庭血圧値とは独立して、全認知症、VaDおよびAD発症の危険因子であることが示唆された。